

アルジェリア国における地震災害に対する 国際緊急援助隊救助チーム活動報告書

平成15年8月

JICA LIBRARY



1173137[9]

国際協力事業団
国際緊急援助隊事務局

緊災

JR

03-07

**アルジェリア国における地震災害に対する
国際緊急援助隊救助チーム活動報告書**

平成15年8月

国際協力事業団
国際緊急援助隊事務局



1173137[9]

序文

平成15年5月21日にアルジェリア国で発生した大地震は同国に甚大な人的及び物的被害を及ぼしました。日本国政府はアルジェリア国政府の要請に基づき国際緊急援助隊救助チームを派遣し、一人でも多くの人命を助けるため同国で捜索・救助活動にあたりました。

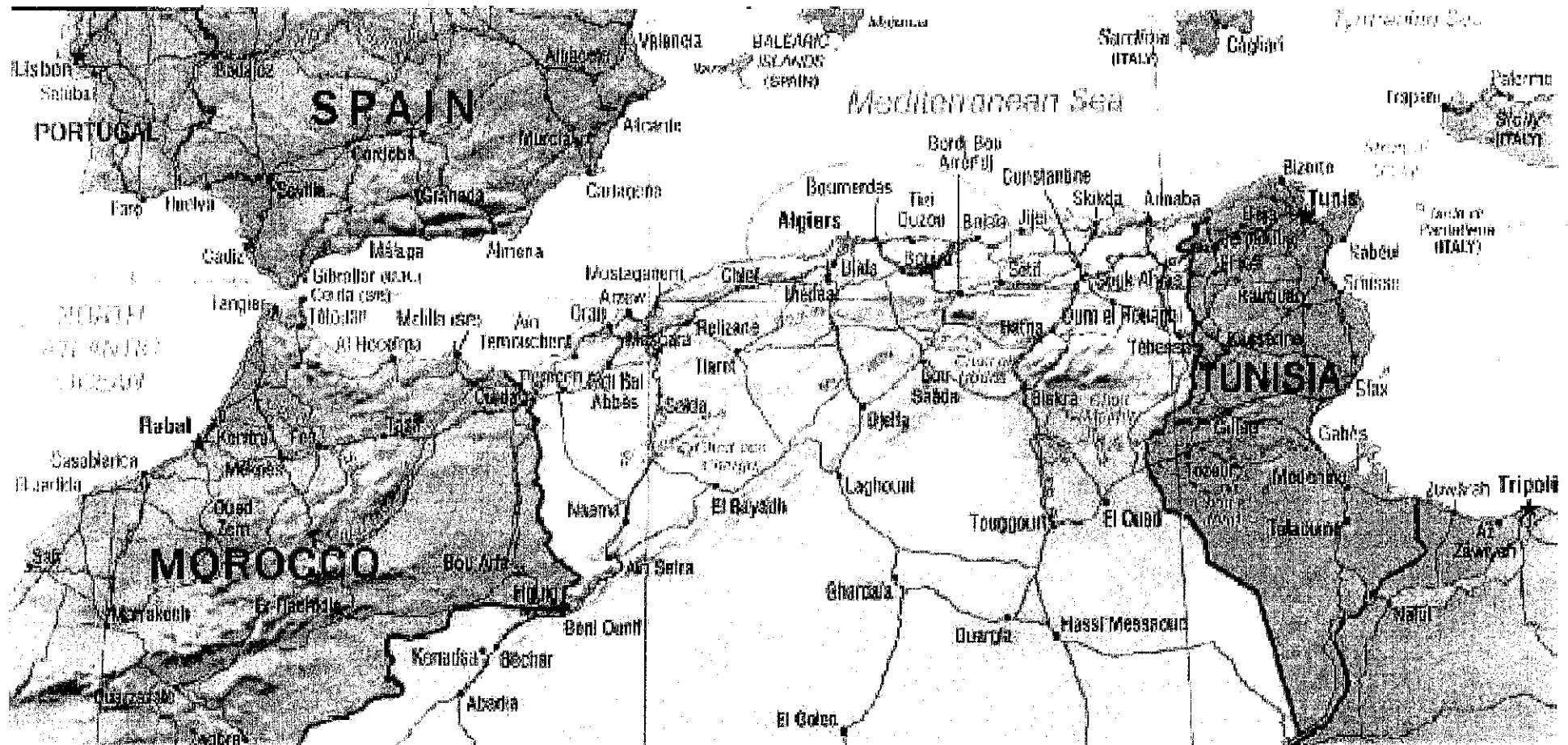
派遣に際しては距離的なハンディを乗り越え、ヨーロッパ各国の救助隊とほぼ同時に現地入りしました。被災現場では、ホテルに生き埋めとなった6名の捜索・救助にあたり、トルコ国救助チームとの連携により1名の生存者を救出することができました。

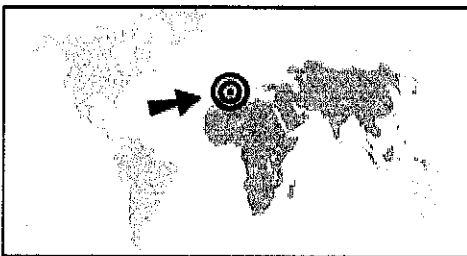
国際緊急援助隊救助チームのような活動はアルジェリア国、日本国、そして世界においても広く賞賛を得ることとなりました。本報告書はその活動についてまとめたものであります。本報告書が国際緊急援助隊の理解、そして今後の国際緊急援助隊救助チームの強化につながることを願ってやみません。

この度の地震で命を落とされた方々のご冥福、そして一日も早い同国の復興を願うとともに、国際緊急援助隊の活動についてご理解とご協力をいただいた皆様に感謝の意を表します。

平成15年8月

国際協力事業団
理事 松岡和久



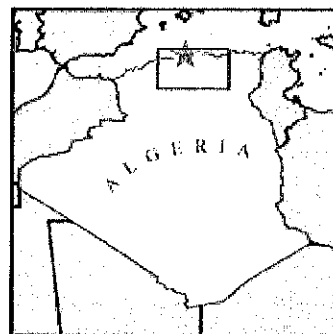


Algeria - Earthquake

26 May 2003

OCHA Situation Report No. 7

2,217 persons have died, while those injured now number 9,085. The Government's preliminary estimates are that up to 200,000 people have been rendered homeless by the earthquake.



According to the Algerian Interior Ministry:

2,217 dead

9,085 injured

200,000 homeless

Source: OCHA Situation Report No. 7
Algeria - Earthquake
26 May 2003

Magnitude: 6.7 Richter Scale
Epicenter: 36.89N 3.78E
Source: USGS

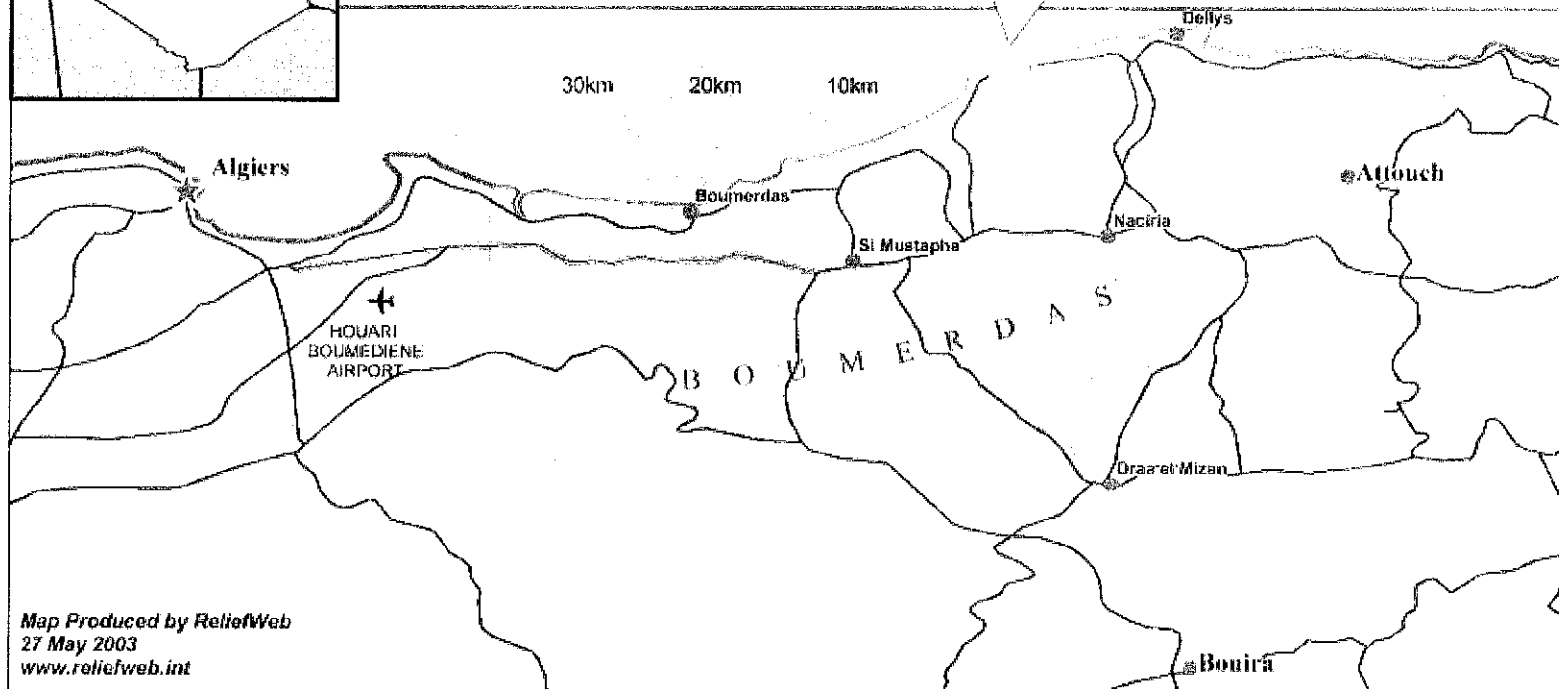
Roads

Divided Highways

Path or Trails

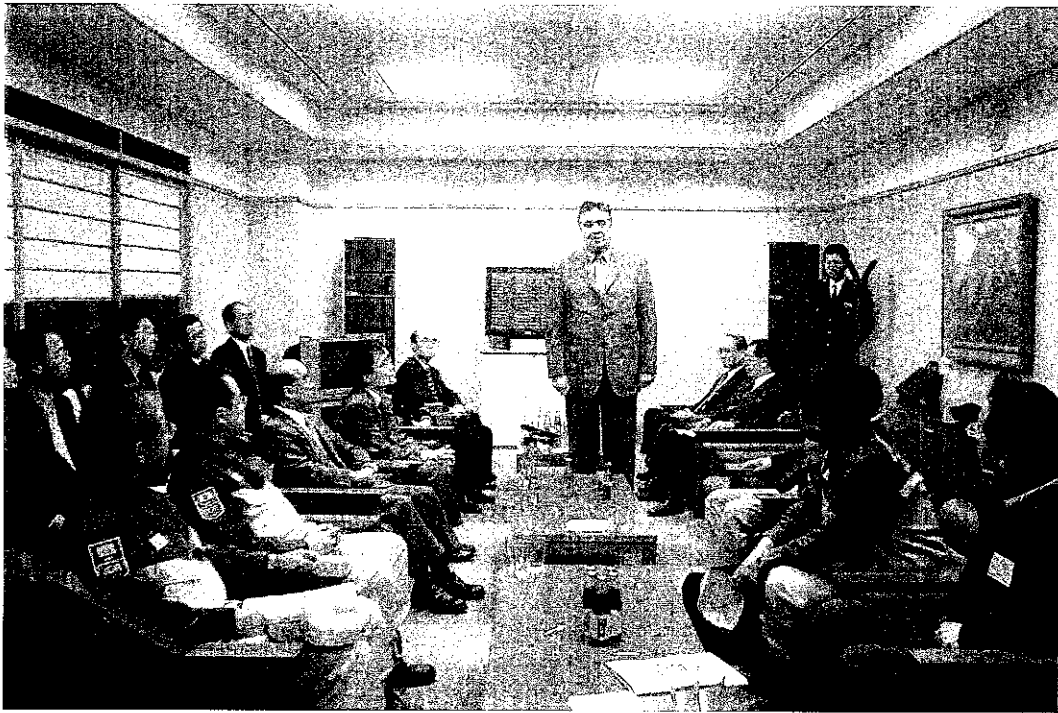
Primary/Secondary Roads

0 5 10 20 Kilometers



Map Produced by ReliefWeb
27 May 2003
www.reliefweb.int

The boundaries and names shown and the designations used on this map do not imply official endorsement or acceptance by the United Nations



結団式 駐日アルジェリア国ベンジャマ大使の挨拶



アルジェリア国到着後現地災害対策本部と打ち合わせを行なう



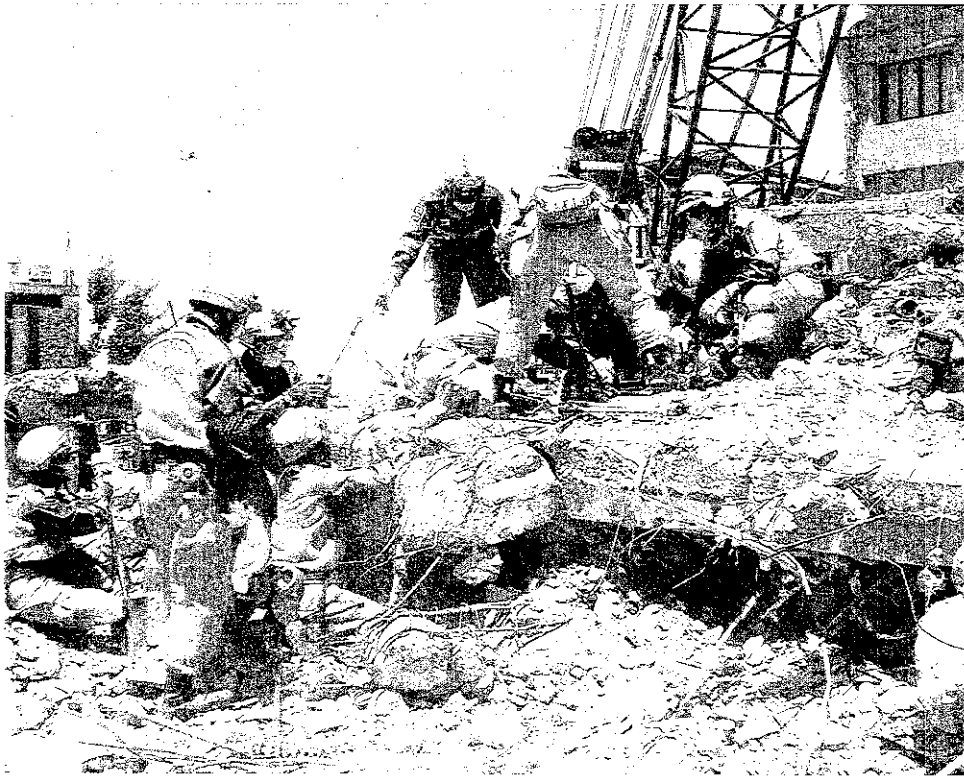
5月23日23時59分生存者を救出



救助犬ニック号・クセノ号の活躍



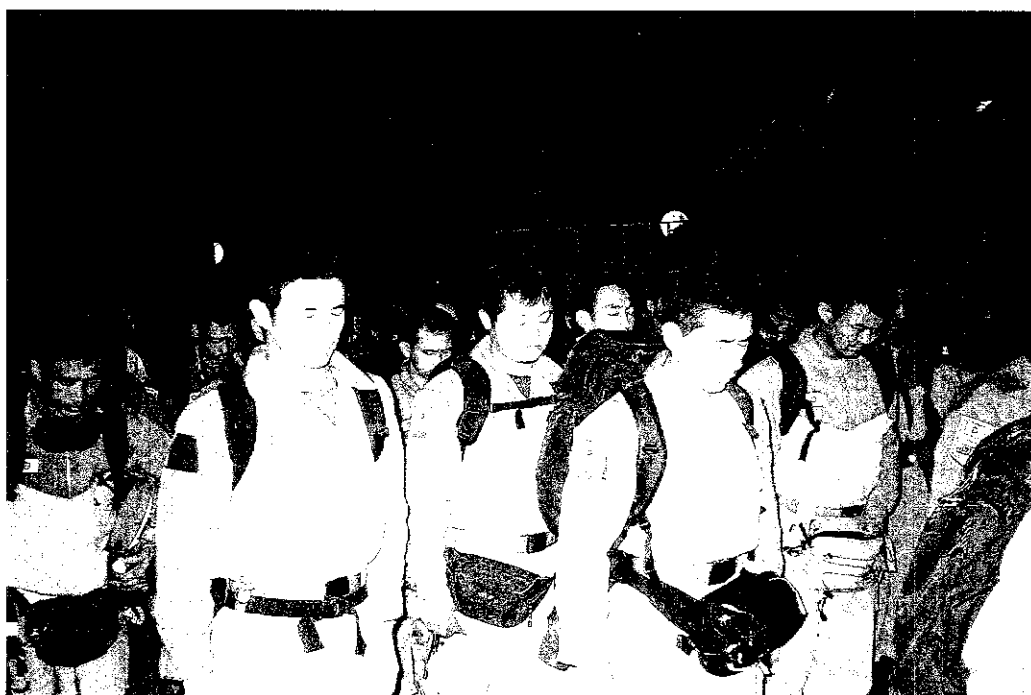
活動現場



活動現場



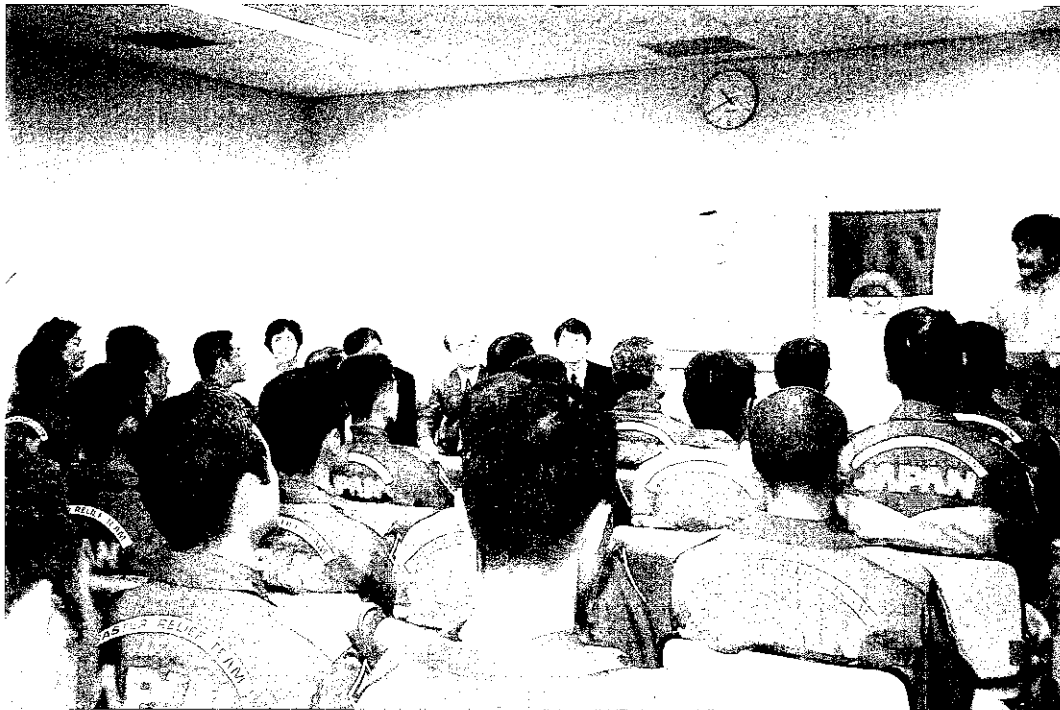
救出されたラドワン・ナレムワジさんを見舞う



活動終了後黙禱をささげる



大使館報告



解団式

目 次

序文

地図

写真

目次

| | |
|--------------------------|----|
| 1. 災害概要 | 1 |
| (1) 災害状況 | 1 |
| (2) 被害状況 | 1 |
| (3) アルジェリア国政府の対応 | 1 |
| (4) 他国援助機関の対応 | 1 |
| 2. 活動内容 | 2 |
| (1) 派遣までの経緯 | 2 |
| (2) 活動記録 | 2 |
| (3) 派遣目的・任務 | 6 |
| (4) 活動概要 | 6 |
| (5) 派遣メンバー | 7 |
| 3. 特記事項 | 10 |
| (1) JICA 帰国研修員との連携 | 10 |
| (2) チーム編成における新しい試み | 10 |
| 4. 医療班報告 | 11 |
| (1) 派遣決定の経緯 | 11 |
| (2) 活動目的 | 11 |
| (3) 携行資機材 | 11 |
| (4) 医療活動概要 | 12 |
| (5) まとめ・課題 | 13 |
| 5. 業務調整員報告 | 15 |
| (1) 移動・輸送 | 15 |
| (2) 機材管理 | 16 |
| (3) 活動環境整備 | 16 |
| (4) 生活環境整備 | 16 |
| (5) 報告・記録・広報活動 | 17 |
| 6. 総括 | 18 |

資料

| | |
|--|----|
| 1. 活動報告メモ | 21 |
| 2. 携行機材リスト | 49 |
| 3. 現地災害対策本部提出報告書 | 53 |
| 4. ホテルオーナーからの感謝状 | 57 |
| 5. OCHA Situation Report No.1,8,9 及び日本国の活動紹介 | 61 |
| 6. アルジェリア地震に対する各国及び国際機関等の援助 | 79 |
| 7. 報道関連資料 | 83 |

1. 災害概要

(1) 災害状況

発生時刻：2003年5月21日 19:44

(日本時間5月22日 3:44)

地震の規模：マグニチュード6.7

震源地：アルジェリア国首都アルジェ東方ブーメルデス県

(2) 被害状況

・人的被害

死者：2,266名 負傷者10,000名以上 (5月28日時点)
(国連人道問題調整事務所 (UN OCHA) 発表 Situation Report No. 9による)

・物的被害

全壊・半壊家屋数多数

(3) アルジェリア国政府の対応

地震発生後ブーテフリカ大統領が緊急対策委員会を招集、ゼルフニ内務大臣が被災地を訪問するなどした。医療関係者及び電力公社は総動員体制をとって対応していた。市民に対しては輸血の呼びかけがなされた。

被害の甚大さに鑑み、アルジェリア国政府は、現地時間22日付外交団宛の口上書及び23日付日本大使館宛の口上書にて、わが国に対し緊急援助隊（救助チーム）の派遣を要請した。

(4) 他国援助機関の対応

資料6「アルジェリア地震に対する各国及び国際機関の援助」のとおり。

2. 活動内容

(1) 派遣までの経緯

5月22日のアルジェリア国政府からの要請を受け、日本国政府は国際緊急援助隊救助チームの派遣を正式決定し、第1陣・第2陣あわせて61名の隊員を派遣することとなった。

(2) 活動記録

5月22日(木)

| | |
|-------|--------|
| 3:44 | 地震発生 |
| 14:45 | 派遣決定 |
| 19:30 | 結団式 |
| 21:55 | 第1陣成田発 |

5月23日(金)

| | |
|-------|--------|
| 11:10 | 第2陣成田発 |
|-------|--------|

(以上日本時間による表示)

(以降現地時間による表示)

5月23日(金)

| | |
|-------|--|
| 10:25 | 先遣隊(石樽団長、石田副団長、川島中隊長、深井団員)がアルジェ空港到着。即刻アルジェリア側窓口(災害調整官のアブドゥラリ・ベグーラ氏)と協議・調整に入り、ブーメルデスの災害対策本部に向かうことを決定 |
| 12:17 | 空港出発 |
| 13:30 | ブーメルデス県庁到着→消防本部へ |
| 14:15 | 消防本部の現地対策支部でブーメルデス県テニア市への派遣を要請される |
| 14:25 | (第1陣後発隊アルジェ空港着) |
| 14:50 | 現地着。集合住宅の崩落現場を視察 テニア市概況 人口2万人、死者90人、負傷者270人、行方不明者2人(1人救助、到着時は残った1人の少女の救助活動中) →人海戦術のため、日本の支援は不要と判断→ゼンムリへ向かう |
| 16:15 | ゼンムリ到着 現地各所を視察 |

| | |
|-------|---|
| 16:50 | ゼンムリの海岸沿いのホテル「コンプレックス ル ロータス」における救助活動を決定（当ホテルは6階建ての建物が全壊。2人死亡、1人負傷（救出）。5人が生き埋めになっているとの情報） 到着時は重機を使い、ホテルオーナーが救出作業を試みていた。 |
| 19:00 | ルクセンブルグ、ドイツチーム到着。救助犬5頭により捜索するも、生存反応なしにより、撤退。 |
| 19:20 | 第1陣後発隊14人（警察庁、消防庁、海上保安庁、JICA職員）が到着。救助活動開始。電磁波人命探査装置「シリウス」にて3箇所生存者特定を実施。いずれも反応なし。簡易型画像探査装置（棒カメ）2台により捜索。 また、簡易破壊器具を使用し、局部破壊、倒壊家屋内検査実施。 |
| 21:30 | 合同で作業にあっているトルコ隊（20人）と交替。 引き上げる最中、長谷川隊員（海保）が「こもった声が聞こえた」と、生存者を確認。その後、トルコ隊とともに生存者の掘り出し作業が続く。 |
| 21:42 | 1台目の救急車到着 |
| 22:03 | 2台目の救急車到着 |
| 22:50 | （第2陣アルジェ空港着） |
| 23:56 | 閉じ込められている男性に対し、点滴開始 |
| 23:59 | 従業員のラドワン・ナレムワジさん（21歳・男性）救出成功 |
| 24:01 | 救急車収容 |
| 24:02 | 生存者がまだいる可能性があるとして、捜索続行決定 |

5月24日（土）

| | |
|------|--|
| 4:10 | 第2陣（最終組）43人が機材、救助犬とともに、JDR指揮本部の置かれるゼンムリのホテル「コンプレックス ル ロータス」に到着。警察庁、消防庁、海上保安庁の隊員による11人の混成チーム3班を編成。 |
| 5:00 | 救助犬（ニック、クセノ）による探索。前日に続き、再度電磁波人命探査装置「シリウス」による生存者の探索を実施するが生存反応なし。 その後、各班がそれぞれ一時間ずつ、瓦礫の山となったホテルの崩落現場に生き埋めになっていると思われる人々の探索活動を続けた。 |
| 6:00 | 石樽団長他が、日本がトルコチームと協力して生存者1名救出 |

| | |
|-------|--|
| | の事実をブーメルデス県庁、同現地対策本部、消防本部、及びOSOCCに報告 |
| 10:00 | 被災者のものと思われるメガネを瓦礫の中から発見。この日から参加したアルジェの軍隊と共同作業で、その地点を重点的に捜索にかかった。 |
| 11:35 | 被災者の男性を発見 |
| 13:55 | 救出（死亡） |
| 16:30 | 前日生存者の発見された付近にて2人目の遺体を発見 |
| 18:30 | 救出（死亡） |
| 20:00 | 作業中断。 |
| 22:00 | 宿舎へ向かう。 |

5月25日（日）

| | |
|-------|--|
| 9:50 | 救助活動再開 |
| 11:30 | 石樽団長、小林団員他が、医療チームのニーズ及び活動拠点調査のためブーメルデス県庁、同現地対策本部、消防本部、病院、OSOCCを訪問した他、各国救助チームと意見交換した。 |
| 13:26 | 3体目の遺体発見 |
| 14:22 | 1体目の救出作業中、付近の探索作業中に4体目を発見。 （現場がレストランであり、カップが2つあったことなどから、3体目の近くにあると判断） |
| 15:23 | 3体目を救出（死亡） |
| 15:31 | 4体目を救出（死亡） |
| 16:20 | 副団長らがテニア視察。 |
| 16:21 | 5体目発見 |
| 16:40 | 石樽団長、長谷川隊員らが救出されたラドワンさんに面会するためにブーメルデス市民病院へ向かう。その後ゼンムリの医療チーム活動拠点を視察。 |
| 16:50 | ラドワンさんと病院で面会。石樽団長がねぎらいの言葉。長谷川隊員が「よくがんばったね」。そばにいたラドワン氏の母親も「ありがとう」を繰り返した。足や首を打ってはいるが、命に別状はないとの医師の報告を受ける。 |
| 20:10 | 5体目、救出（死亡）。ホテルオーナー、地元住民らから聞いた情報による生き埋めになっていると思われた6人全ての救出（1人生存、5人死亡）完了。 |

| | |
|-------|---|
| 21:00 | 救助犬2頭及びシリウスによる探索を再度実施。生存者のないことを確認し、現地撤収。ホテルのオーナーから救助チームへ感謝状授与。全員で黙祷 |
| 22:30 | 宿舎着 |

5月26日(月)

| | |
|-------|---|
| 10:00 | 宿舎集合 |
| 10:15 | 大使館到着 |
| 10:20 | 隊員らの作業について指示(機材の洗浄など) |
| 10:30 | 三陸沖地震についての情報入る |
| 10:35 | <p>総括会議開始</p> <p>石樽団長始め、石田・渡辺・羽山・中本副団長、井上医師ら13人が出席。23日からの3日間の活動についての反省点、今後の課題などについて協議。</p> <p>救助犬の使い方、トルコチームとの共同作業(国際協力)、地元住民との連携、医療チームの派遣、体制の在り方などについて評価点・今回初となった通信班、医療班の効果大</p> <p>課題点・地元住民との連携(通訳など含む)、地元への物資供与、機材の充実(衣類、装備など。食料・水については十分との声)</p> <p>長時間作業についての、一定の体制(人員)の確保の要など</p> |
| 15:00 | (医療チームアルジェ到着) |
| 18:30 | ブーメルデス消防本部現地対策支部へ活動報告 |
| 18:50 | 国連現地活動調整センターOSOCC(on site operation's coordination center)への報告 |
| 19:10 | ブーメルデス県庁への報告 |
| 19:45 | 医療チーム活動予定地視察(ゼンムリ地区) |
| 20:30 | ゼンムリ発、宿舎へ |
| 22:00 | 宿舎着 |

5月27日(月)

| | |
|-------------------|------------------|
| 8:00 | 大使館着。報告。 |
| 11:00 | 大使館発 |
| 14:00 | アルジェ空港発(45分遅れ) |
| 17:00 (イタリア時間) | ローマ着。空港ホテルチェックイン |

5月28日(火)

| | |
|-------|------------|
| 8:00 | 宿舎発 |
| 10:20 | ローマ発ミラノ空港へ |
| 14:35 | ミラノ空港発成田へ |

(全てイタリア時間)

5月29日(水)

| | |
|-------|-----|
| 9:20 | 成田着 |
| 10:30 | 解団式 |
| 11:30 | 解散 |

(全て日本時間)

(3) 派遣目的・任務

活動目標：アルジェリア国地震災害における人的（肉体的・精神的）被害の軽減

上記活動目標達成のため、アルジェリア国政府及び他国援助機関と協力し、地震による被災者の捜索、救出、応急措置、安全な場所への移送などの活動を行う。

(4) 活動概要

アルジェリア国到着後、災害対策本部との打ち合わせに基づき被災地のゼンムリ地区の6階建てのホテル「コンプレックス ル ロータス」の倒壊現場にて、活動を開始した。

その後3日間の捜索・救助活動の結果、ホテル内の行方不明者6名を全員救出、うち1名は生存者であった。

日本の救助チームの活動については先方政府及び内外のマスコミでも高く評価された。

(5) 派遣メンバー

第1陣：2003. 5. 22～5. 29

| | 氏名 | 所属先 | 指導科目 |
|----|--------|---------------------|------|
| 1 | 石樽 利光 | 外務省国際緊急援助室 | 団長 |
| 2 | 中本 敦也 | 消防庁 | 副団長 |
| 3 | 渡辺 道雄 | 警察庁 | 副団長 |
| 4 | 羽山 登志哉 | 海上保安庁 | 副団長 |
| 5 | 石田 幸男 | JICA国際緊急援助隊事務局災害援助課 | 副団長 |
| 6 | 廣瀬 竜夫 | 警察庁 | 通信 |
| 7 | 寺内 克元 | 警察庁 | 通信 |
| 8 | 川島 一郎 | 消防庁 | 中隊長 |
| 9 | 山田 哲夫 | 消防庁 | 救急救助 |
| 10 | 鈴木 忍 | 消防庁 | 救急救助 |
| 11 | 松原義夫 | 警察庁 | 救急救助 |
| 12 | 日笠照男 | 警察庁 | 救急救助 |
| 13 | 長谷川提司 | 海上保安庁 | 救急救助 |
| 14 | 稲葉健人 | 海上保安庁 | 救急救助 |
| 15 | 中武貞美 | 警察庁 | 業務調整 |
| 16 | 玉越哲治 | 海上保安庁 | 業務調整 |
| 17 | 深井久美 | JICA総務部広報課 | 業務調整 |
| 18 | 原田勝成 | JICA国際緊急援助隊事務局災害援助課 | 業務調整 |

第2陣：2003. 5. 23～5. 29

| | 氏名 | 所属先 | 指導科目 |
|----|--------|----------------------|------|
| 1 | 山川 良博 | 警視庁警備部警備第二課 | 救急救助 |
| 2 | 大牟田 義貢 | 警視庁警備部警備第二課 | 救急救助 |
| 3 | 羽賀 忠範 | 警視庁警備部警備第二課 | 救急救助 |
| 4 | 小川 英文 | 警視庁警備部災害対策課 | 救急救助 |
| 5 | 西 文宏 | 警視庁警備部第二機動隊 | 救急救助 |
| 6 | 佐戸 聖史 | 警視庁警備部第三機動隊 | 救急救助 |
| 7 | 瀧 茂雄 | 警視庁警備部第四機動隊 | 救急救助 |
| 8 | 天辰 孝太郎 | 警視庁警備部第五機動隊 | 救急救助 |
| 9 | 岩野 徹 | 警視庁警備部第六機動隊 | 救急救助 |
| 10 | 瀬戸 善史 | 警視庁警備部第七機動隊 | 救急救助 |
| 11 | 石崎 文雄 | 警視庁警備部第八機動隊 | 救急救助 |
| 12 | 大貫 龍夫 | 警視庁警備部第九機動隊 | 救急救助 |
| 13 | 谷 英哉 | 警視庁警備部特科車両隊 | 救急救助 |
| 14 | 菅原 義美 | 仙台市消防局 | 救急救助 |
| 15 | 大井 剛 | 仙台市消防局 | 救急救助 |
| 16 | 舟木 重喜 | 川口市消防本部 | 救急救助 |
| 17 | 宮崎 克美 | 川口市消防本部 | 救急救助 |
| 18 | 大塚 一孝 | 朝霞地区一部事務組合埼玉県南西部消防本部 | 救急救助 |
| 19 | 金子 孝博 | 朝霞地区一部事務組合埼玉県南西部消防本部 | 救急救助 |
| 20 | 浦川 和幸 | 東京消防庁 | 救急救助 |
| 21 | 宮本 和敏 | 東京消防庁 | 救急救助 |
| 22 | 中藤 克哉 | 東京消防庁 | 救急救助 |
| 23 | 安永 豊 | 東京消防庁 | 救急救助 |
| 24 | 畠岡 豊彦 | 東京消防庁 | 救急救助 |
| 25 | 渡辺 憲司 | 京都市消防局 | 救急救助 |
| 26 | 村井 広一 | 京都市消防局 | 救急救助 |
| 27 | 小倉 章史 | 第三管区海上保安本部羽田特殊救難基地 | 救急救助 |
| 28 | 寺島 龍也 | 第三管区海上保安本部羽田特殊救難基地 | 救急救助 |

| | | | |
|----|--------|---------------------|------|
| 29 | 齋藤 一世 | 第三管区海上保安本部羽田特殊救難基地 | 救急救助 |
| 30 | 岡 大一郎 | 第三管区海上保安本部羽田特殊救難基地 | 救急救助 |
| 31 | 切通 亮 | 第三管区海上保安本部横浜海上保安部 | 救急救助 |
| 32 | 原田 篤 | 第三管区海上保安本部横浜海上保安部 | 救急救助 |
| 33 | 廣瀬 功一 | 第七管区海上保安本部福岡海上保安部 | 救急救助 |
| 34 | 小楠 幸康 | 第七管区海上保安本部福岡海上保安部 | 救急救助 |
| 35 | 一田 大輔 | 第七管区海上保安本部福岡海上保安部 | 救急救助 |
| 36 | 長濱 真吾 | 第十一管区海上保安本部 | 救急救助 |
| 37 | 井上 潤一 | 東京災害医療センター | 救急医療 |
| 38 | 福島 憲司 | 埼玉医科大学総合医療センター | 救急医療 |
| 39 | 後藤 美智子 | 東京災害医療センター | 救急医療 |
| 40 | 吉岡 留美 | (株) JA-LPガス情報センター | 救急医療 |
| 41 | 小林 正雄 | 外務省中東アフリカ局中東一課地域調整官 | 業務調整 |
| 42 | 沖田 陽介 | JICA国際緊急援助隊事務局災害援助課 | 業務調整 |
| 43 | 大友 仁 | JICA国際緊急援助隊事務局災害援助課 | 業務調整 |

3. 特記事項

(1) JICA 帰国研修員との連携

生存者救出はトルコ国救助チームとの共同作業により行った。合同で行うことになったきっかけは、トルコ国救助隊員から「イッシュニヤリマセンカ？」と日本語で日本チームとの共同作業の申し入れがあったことである。彼は、大阪市消防局で研修を受けた JICA の帰国研修員であった。日本チームはこれを快諾した。

1999年のトルコ西部地震災害の際、日本チームは1人の生存者を救出しており、トルコと日本のきずながさらに深まった感がある。

(2) チーム編成における新しい試み

1) 初めて捜索救助犬を帯同

警察庁の捜索救助犬ニック号（6歳シェパード）とクセノ号（3歳シェパード）が3名のハンドラーとともに捜索活動に参加した。国際緊急援助隊救助チームが捜索救助犬を帯同したのは初めてのことである。

2) 救助隊の訓練を受けた医療班を帯同

コンファインドスペース医療の訓練を受けた医師2名、看護師2名計4名の医療班が救助チームに帯同した。猛暑の中、昼夜を問わず倒壊したホテルのがれきと格闘した隊員たちの健康管理を担い、擦り傷・めまい等を訴える隊員や現地の救助関係者など延べ36名に対し診療を行った。

3) 広報団員として初めて JICA 広報課職員の参团

JICA 広報課職員が広報団員として参团した。これによりニュースバリューの高い広報記事と映像情報をマスコミに発信することができた。

4) 初めての通信専門家の参团

警視庁の国際通信の専門家2名が初めて参团し検視指揮本部において、本部との交信、現地での無線交信に尽力し、チームのスムーズな活動に貢献した。

4. 医療班報告

(1) 遣決定の経緯

2000年以降、国際救助捜索諮問グループ（INSARAG）ガイドラインに沿った救助チームを派遣することがJDRの目標とされ、本隊の整備とともに、捜索救助犬と医療班の参加が課題となっていた。

これに対応してJDR医療チーム（JMTDR）においては、2002年より中級研修においてSRM（捜索救助医療）講座を設置し、3回の講義を行うとともに、夏の救助チーム総合訓練に参加し、体制を整えていたところであった。

今回は派遣決定と同時にこのINSARAGガイドラインに沿ったチームが構成され、本隊と同時に医療班の派遣が行われた。

(2) 活動目的

- 1) 隊員に対するメディカルサポート：医療処置、健康管理
- 2) 隊全体の衛生管理：トイレ、水利、手洗い、うがい
- 3) 要救助者への医療処置

救助隊の絶対原則は被災地にさらなる負担をかけないことである。したがって、万一隊員が負傷した場合も、基本的には自隊において初期治療を行い被災地外へ搬送しなければならないことから、医療班の帯同は不可欠である。

とくに今回の活動は61名という大編成で、遠く離れたアルジェリアで活動することから、隊員に対する医療のサポートは必須と考えられた。

また被災後48時間以内での現地入りが可能で生存者救出が十分期待できる状況であったことから、要救助者への医療処置にも対応可能な体制をとった。

(3) 携行資機材

心肺停止を含むあらゆる状況に必要な最低限の処置を行えること、原則として医療班2名で携行できることを目標に、JMTDRドクターセット以外に以下の資機材を携行した。

- ・ 心肺蘇生セット：気管挿管セット・バグマスク
- ・ 除細動器
- ・ 心電図・SpO2モニター
- ・ 緊急薬剤セット（16粒）
- ・ 輸液セット：リンゲル液500mlパック＋輸液回路一式10人分
- ・ 内服薬：抗生物質、解熱鎮痛、感冒、消化器、眠剤、点眼、うがいのべ30人分

以上の資機材の総重量は約60kgとなり、ジュラルミンケース1個と医療用

バッグ2個に収納携行した。

(4) 医療活動概要

現地指揮本部内に救護室を開設し、傷病者の治療にあたる一方、必ず現場に蘇生セットを携行したスタッフ1名を待機させ、不測の事態に備えるとともに活動状況・隊員の疲労度等をモニターした。

傷病者の治療優先順位は携行資機材の数量から1.チーム隊員、2.現地スタッフ、3.要救助者、4.一般被災者とした。

1) 診療

3日間の現地サイトでの活動中の診療状況は以下のとおりである。

5月24日：18名

5月25日：12名

5月26日：6名 (計36名)

(内訳)

隊員・スタッフ：26名 (点滴1、処置17、内服8)

現地消防・現地スタッフ：4名 (処置4)

現地住民：6名 (処置2、消毒1、診察3)

現地入り直後の24日に患者数がもっとも多く、医療班としても到着後即時診療という体制が必要であった。

また、粉塵に伴う眼症状と、切創・挫創が最も多かった。

現地活動時間以外に行った内服薬処方等は12名であった。

2) 健康管理

出発時、活動中、帰国時に問診表形式のメディカルチェックを行った。これにより各隊員の健康状況、精神的ストレスの有無等を確認した。

3) 衛生管理

当初2日間断水状態であったため、トイレ及び手洗い、うがい、洗眼の面で工夫を要した。

トイレに関しては、簡易トイレが設営され、大小便を分けることで対応した。

手洗い・うがいに関してはイソジン入りボトルタンクを設置し、活動後及びトイレ使用後の励行を指導した。

24日は晴天で気温も高く、発汗による消耗を多くの隊員に認めたため、水

分摂取、日蔭もしくは屋内での休憩、衣服を緩めることによる体温冷却などを指導した。

また今回の活動では、遺体救出も5例にのぼったことから、体液等からの感染を予防するようマスク・ラテックスグローブの着用、汚染衣服の着替え等を指導した。

4) 要救助者への医療

医療班を含む第2陣が現地サイトに到着する直前に生存者1名が救出されるという快挙があった。

この際には、第1陣の救急救命士有資格隊員（発見も同隊員であった）がトルコ隊医師と協力し、静脈路確保、酸素投与等にあたった。

その後の活動では残念ながら生存者救出はできなかったが、我々の活動においても大きな誇りと励みになった。

また活動を通して、救急救命士と連携を行った。

5) JMTDR 活動サイト選定

JICA スタッフの協力のもと現地対策本部と協議し、後続の JDR 医療チーム (JMTDR) の活動サイトを選定した。本隊の任務に支障を来さないことを条件に、今後は活動目的の一つに加えることを検討したい。

(5) まとめ・課題

今回の派遣は INSARAG ガイドラインに準拠した、我が国初の都市搜索救助活動 Urban Search and Rescue (USAR) という画期的なものであった。医療班においては試行錯誤の部分も少なからずあったが、団長以下全隊員、現地日本大使館等の全面的な協力により、任務を遂行することができた。

そして、多くの隊員から「安心して活動することができた」という言葉を頂けたことは、医療班として誠にうれしく参加した意義を感じた。

実際あのハザードの多い環境、ハードなコンディション、言葉の通じない現地隊との共同作業など、隊員が負傷することはあり得ないことではない。しかし、その場合現地医療機関での治療に多くを期待することは困難である。したがって危険な環境で隊員が安心して活動するためにも、医療班の帯同は必須であることを痛感した。

また現地の困難な環境で良好な衛生状態を維持することも医療班の重要な役目であった。

さらに、前述したように今回の活動では、遺体救出が5例にのぼったことから、隊員の惨事ストレスに対する何らかのフォローも必要であると思われた。

救急救命士有資格隊員は、上述の活動成果をみても明らかなとおり、現場での救助活動はもとより派遣活動全体を通じて救助チームと医療班のコーディネーター的役割を果たすことから不可欠な人員である。今後とも最低1名、可能であれば2名の救命士有資格救助隊員の参加を検討する必要がある。

女性看護師の参加は、男性医師にはない細やかな気配りであらゆる場面で活躍していたことから、活動のハードさに耐えられる人であれば、今後とも是非帯同する必要がある。

資機材に関しては、今回の経験をもとに早急に整備していきたい。

JMTDRにおいては、このような救助チームとの連携活動に対応可能な人材の養成を早急に進め、今後の活動に備えたい。

5. 業務調整員報告

(1) 移動・輸送

・往路（成田－アルジェ）

地震発生当日に派遣が決定されたが、61名の隊員全員の空席を確保することができず、21日の第1陣18名と22日の第2陣43名にフライトを分けることとなった。さらに第1陣のうちパリ－アルジェ間のフライトの確保が可能であった4名分について、団長はじめ4名が先遣隊としていち早く現地に着し、現地対策本部との打ち合わせ、活動サイトの選定を行った。

（第1陣18名）

| 出発・到着地 | フライト | 備考 |
|------------------|-------------------------------------|---------------------|
| 成田 パリ（ドゴール） | AF277 5/22 21:55 発 5/23 04:15 着 | 第1陣18名全員 |
| パリ（オルリー） アルジェ | AH1009 5/23 09:10 発 5/23 10:25 着 | 18名のうち4名 |
| パリ（ドゴール） アルジェ | AH1003 5/23 13:00 発 5/23 14:25 着 | 残り14名及び第一陣 資機材一式 |

（第2陣43名）

| 出発・到着地 | フライト | 備考 |
|------------------|-------------------------------------|---------------------|
| 成田 パリ（ドゴール） | JL405 5/23 11:10 発 5/23 16:45 着 | 第2陣43名全員及び 資機材一式 |
| パリ（オルリー） アルジェ | AH1007 5/23 21:30 発 5/23 22:50 着 | 同上 |

パリ以遠のフライトの予約、パリでの移動（ドゴール－オルリー間）に係る車両手配、チェックイン支援、アルジェ空港出迎え等について、在アルジェリア日本国大使館及びJICA フランス事務所の支援を受けた。乗り継ぎの際の荷物の積み下ろし、個数確認について、隊員の方々の協力を頂き、紛失する荷物もなく、全てアルジェまで全量を同時携行することができた。

空港より活動サイトまでの移動については在アルジェリア日本国大使館の手配したトラックによって行った。

・復路

| 出発・到着地 | フライト | 備考 |
|-------------|------------------------------------|--------------|
| アルジェ ローマ | AZ801 5/27 14:00 発 5/27 17:00 着 | 61名全員及び資機材一式 |
| ローマ | AZ1024 5/28 10:20 発 | 同上 |

| | | |
|-----------|-----------------------------------|----|
| ミラノ | 5/28 11:35 着 | |
| ミラノ 成田 | AZ786 5/28 14:35 発 5/29 9:20 着 | 同上 |

フライトの手配やチェックインについて在アルジェリア日本国大使館及び JICA フランス事務所の支援を得た。航空機の輸送量の関係でアルジェ空港にて全量の資機材を積み込むことができなかったが、後日別便で輸送された。

(2) 機材管理

携行資機材の管理について、救助資機材については活動サイトにて保管した。その他活動本部内に置くことのできるものについては活動本部内に鍵をかけて保管することとした。

携行した機材のうち、消耗品を中心とした、活用が可能と思われるものについては、救助チームと入れ替わりでアルジェリア入りした医療チームに引き渡した。

(資料 2 携行機材リスト参照)

(3) 活動環境整備

・活動地の選定

現地対策本部との協議の結果、首都アルジェより東方 50 km のブーメルデス県ゼンムリのホテル「コンプレックス ル ロータス」の倒壊現場にて捜索・救助活動を行うことを決定した。

・活動本部の設置

ホテルのオーナーより、ホテル横にある倒壊を免れたロッジ（2 階建て）3 棟を自由に使ってよいとの承諾を得たので、そのうち 1 棟に活動本部を設置した。本部では活動中、団長、副団長、業務調整員が集合し、活動進捗・今後の活動についてのミーティングを行った。

同本部では発電機により自家発電を行い、活動記録作成用のパソコンを設置したほか、プリンター、通信用のインマルサット、無線機等も設置した。日中は広報団員、業務調整員を中心に適宜 JICA 国際緊急援助隊事務局、その他関係機関と連絡をとった。

(4) 生活環境整備

・宿舎

活動サイト到着後、当初の 2 日間の生存者救出のゴールデンアワーと呼ばれる発災後 72 時間が経過するまで現場に留まることとし、サイト周辺で交代で

休憩した。

安全を第一に考え、宿舎はアルジェ市内のホテルに宿泊することとした。ひとつのホテルでは全員分の部屋を確保できなかったため2箇所（ホテルエルデジャザイル及びホテルソフィテルに分かれることとした。活動サイトからは車で約1時間の距離でありバスで通うこととした。

ホテルでは電気や水道などが断絶されていることもなく、風呂やトイレも完備されており、十分に疲れを癒すことができた。

・食事

食事について、活動サイト到着後当初の2日間は缶詰やアルファ米などの携行食だけで済ませたが、3日目にホテルに宿泊可能となつてからは各自がホテルで朝食をとり、昼と夜については携行食での食事とした。当初は日本より持参したアルファ米と魚などの缶詰、カップの味噌汁などをとり、活動3日目に持参した食料がなくなったときには近くの市場でパン、魚の缶詰、フルーツ等を調達した。この際、市場の店主が日本の国際緊急援助隊の活動に理解を示してくれ、食料については代金を受け取ることがなかった。

(5) 報告・記録・広報活動

警視庁所属の通信隊員の活躍により、現地ではインマルサットを十分に活用することができ、日本の外務本省、JICA 国際緊急援助隊事務局、広報課及び日本大使館に電話及びメール送信を通じて活動の報告を行った。メール通信が可能になったことにより広報団員の撮影した救助の瞬間の写真、記事等がすぐに日本国内において報道されるなど、大きな効果が見られた。

日本のメディアでは、現地に2社（NHK、共同通信＝ともにヨーロッパの特派員）が取材に訪れた。NHKは活動サイトを決定するまでの間、同行し、共同通信は生存者救出の後、活動サイトに現れ、長谷川隊員を取材するなどした。

海外のメディアに関しては、団長が積極的にインタビューに応じたほか、滞在ホテルがマスコミ関係者と同じホテルだったこともあり、ホテル内での取材活動にも応じることができた。

6. 総括

(1) 気付きの点

1) 在アルジェリア日本大使館の初動段階での早い一報と「ア」政府からの支援要請の迅速な確認、在「ア」大使館が大規模災害にもかかわらずまだ通信回線が使える時機での素早い災害発生の第一報の通報を行い、また同大使館の徹夜作業による「ア」政府側との緊密なる連絡体制の確保が、先方政府からの救援要請を迅速に確認することが出来、その後の我が国の対応がスムーズに実施出来た大きな理由と思われる。(なお、国連人道問題調整事務所のウェブサイトにおける、わが国救助チームの派遣決定発表が一番早く掲載された)。国際緊急援助隊の活動が少人数の公館にもかかわらず支援を得られたことは大きな支えとなった。

2) 国内関係者の素早い対応

外務省における国際緊急援助隊救助チームの派遣決定を受け、関係各省庁及び JICA は限られた時間内で全国規模で関係者の招集を行うなど、国内での素早い派遣準備が行われた(派遣正式決定後約 7 時間、発災後約 18 時間後に成田発)。

3) 関係省庁間の調和のとれたチームワーク

今次救助活動では、警察庁、消防庁、海上保安庁の各隊員間でのチームワークが良く救助活動が極めてスムーズに行われた。その結果、人命の救助につながるという大きな成果を得ることができたと思われる。これには、途中パリでの待機時間を利用し協議した際、各隊員自身の要望による混成部隊の結成、それに伴う 3 小隊の能力の平均化と確実なローテーションを組むことが図られ、チームの能力が効果的に発揮することにつながった。

4) 国際搜索救助諮問グループ (INSARAG) のガイドラインに沿った国際的水準の体制を整えた最初の救助チームの派遣

ア) 今次災害救助で救助犬 (2 頭) の初出動が実現し、救助犬は要所要所で活躍した(「今や地震災害では救助犬の出動が必要不可欠」とのことが国際的な常識となっており、各国とも最大 30 頭、最小 1 - 2 頭、合計 183 頭の出動がこれを証明している。)

イ) 救助チーム隊員及び要救助者救助時における対応のための医療関係者の参加による各隊員の精神的安心への絶大なる貢献と救助時の救急医療措置への対

応が確保された。同医療班は活動中36人（隊員26人、現地隊員4人、地元住民6人）を救護した。

ウ) また、ガイドラインには表記されていないものの、今回初めて通信専門の隊員が派遣され、インマルサットを利用したスムーズな情報送信が可能となった。このため、関係省庁への情報提供やマスコミ関係者からの照会に対し円滑に対応することができた。インターネットの普及により、情報共有は必須事項であり、通信要員は今後も隊員編成を組む上で必要不可欠と思われる。

5) 国際協力

ア) トルコ救助チームとの現場における協力

生存者1名の救助の際には、トルコの救助チームと合同で実施し、国際的協力的行為の素晴らしい一例となった。これはトルコとの間で1999年8月のイズミット地震の際における76歳の婦人の生存救出続く友好関係のシンボルとなりうるもの。また、トルコの救助チームの中には日本で大阪市消防局主催（JICA）の研修事業に参加したメンバーもあり、作業を続ける上で隊員同士の連携も円滑に進んだ。なお、同救助の瞬間では、両国チーム、地元軍、消防、ホテル関係者及び多くの住民から大きな歓声と拍手が沸き起こり、現場は真夜中の0時にもかかわらず、喜びと安堵の雰囲気がいり一面を支配した。また生存者の父親と一緒に待機していた本団長に握手を求め感謝を表明した状況は劇的であった。

イ) 地元の軍、消防との連携

活動2日目となった24日からはアルジェリア軍・消防も救助活動に全面的に参加。日本チームの資機材のほか、現地手配の重機などを使用しつつ、我が方の救助方法を尊重し、両国チームで連携のとれた作業を行った。なお、先方は救助のための資機材は全くなく、素手、スコップのみで対応していた。重機材としては日本製のブルドーザーやショベルカーを使用していた。

(2) 提言

1) 昨年10月の日本の評価学会での問題提起にもあったように、緊急援助の対応をその後の我が国の2国間援助にどう活かしていくのか、ODAを単に緊急援助だけで終わらせるのではなく更なる段階につなぐことがODAの効果的活用の面から重要である。

2) 即ち、緊急援助の救助チームの派遣及び医療チームの派遣に続き専門家チーム（建築物耐震診断等）の派遣、更にこの分野における技術協力（平成15年度は、フォローアップ事業としてグローバル地震観測機材が供与される予定の由）、倒壊等被害を被った地方医療施設への無償資金援助（因みに、医療チームの活動現場の町では地元の診療所が傾き、壁・天井等が大きな被害を被っていた）が必要である。

3) 緊援隊の海外での研修の実施が不可欠と思われる。今回の災害時ではトルコとの連携プレーにより人命の救助が達成されたことが示されているように、大規模であればあるほど、各国の救助チームとの協力なくして大きな成果は期待出来ないこともありうる。従って、かかる各国救助チームと合同連携作業について国連等が実施している海外における訓練研修に関係省庁の隊員等が積極的に参加してその技術を磨き、また我が国の救助技術のノウハウを各国に広めることが、今後の国際貢献に必要と思われるので是非とも海外研修を実施願いたい。

因みに今次災害前の4月のウズベキスタンにおける国連・NATO との共催による地震災害を想定した訓練が行われ、我が国も参加したところ、団長・副団長クラス間で相互に知り合うことが出来、今次災害の活動では初動から情報交換、方針策定等、極めて迅速・的確に実施できた。

4) 医療チームの災害後の派遣に際しては、緊急時のみならずその後の亜急性期における対応も検討する必要がある。つまり発災後、数日間の急性時の医療行為が災害発生時の外科的処置等の他に、1週間後からの平常時に戻る時機における医療処置までも含む対応を準備する必要がある。（公衆衛生、慢性疾患、不眠症等の症状に対する医薬品の充実）。地元の病院・診療所の機能が完全に破壊された場合にはなおさら必要と思われる。

1. 活動報告メモ

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (1)

作成日時：平成 15 年 5 月 23 日 19:55

作成者：緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/23 19:27 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話による連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | 緊急援助隊事務局 大田 |

内容：

- (1) 約 1 時間前に第 1 陣の先発隊の 4 名（石樽団長、川島中隊長、石田副団長、深井調整員）はアルジェに無事到着。
- (2) 後発隊の 14 名は約 2 時間後に到着予定。
- (3) 各国の援助チームも到着しており、現在 26 グループがアルジェリアに入っている。
- (4) OCHA(Mr. Peter Thomas が中心)が調整を実施しており、日本には最も被災状況が深刻なブーメルデス(Boumerdes: アルジェから東に約 40Km)での活動が依頼された（このことについてはアルジェリア政府からも日本の活動地として指定されたとの由）。
- (5) 先発隊はこれから OSOCC がブーメルデスで開催するドナー会議に出席し、ブーメルデスに留まり、後発隊の到着を待つ予定。
- (6) 後発隊到着後、直ちに救助活動等を開始できるようにする。
- (7) 現在の計画としては現地時間 24 日 18:00 まで三交代の体制で救助活動を展開し、アルジェに戻るのは 24 日 18:00 以降となる予定。
- (8) 日本大使館参事官によると医療分野におけるニーズが極めて高いところ、医療チームの派遣を希望する外務公電を発出する可能性が高いとのこと。
- (9) 本件関係省庁等に連絡していただきたい。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (2)

作成日時：平成 15 年 5 月 23 日 20 : 20

作成者：緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|--------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/23 20 : 05 |
| 情報入手手段 | パリからの電話による連絡 |
| 情報入手先 | JICA フランス事務所 生井所長 |
| 情報入手者 | 緊急援助隊事務局 大田 |

内容：

- (1) 第 1 陣後発隊は現地時間 12 : 25 に 1.5 トンの携行機材とともに、ドゴール空港を AH1003 便にて定刻で出発した。
- (2) 本件についてはアルジェの日本大使館に連絡済み。
- (3) 第 2 陣についてもフランス事務所は支援を予定しており、状況について改めて連絡する。
- (4) なお、第 2 陣に関してはトラック 1 台、バス 4 台、更に JAL のスタッフ 10 名で対応する予定。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (3)

作成日時：平成 15 年 5 月 23 日 23 : 50

作成者：緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|--------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/ 23 : 18-45 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話による連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 原田調整員 及び アルジェ日本大使館 |
| 情報入手者 | 緊急援助隊事務局 大田 坂田 |

内容：

(1) 日本チームの救助活動地域がテニア (Thenia : ブーメルデス県内でアルジェから東に約 60-70Km) となった。

(2) 現在具体的な活動場所を特定するために先発隊は当該地域を調査中。

(以上石田副団長からの情報)

(3) 第 1 陣の後発隊はアルジェ空港に到着し荷物の引き取り作業をしている。

(4) 荷物引き取り後、活動地区であるテニアに直接向かうこととなっている。

(以上アルジェ大使館からの情報)

(5) 第 1 陣の後発隊のフライトは約 1 時間程度遅れ、現地時間 14 : 30 全員無事到着。

(6) 日本チームは海外チームとしてはアルジェリアに 16 番目に入国。

(7) 荷物は引き取り中であるが、引き取り後テニアの Civil Protection Centre に向かう (同 Centre に対策本部があると考えられるとの由)。

(8) テニアに向かう際は警察の先導車が準備される予定。

(9) 現地日本大使館から貸与された電話番号は次のとおり。

第 1 陣先発隊 (石樽団長ほか 3 名) : 213-61-50-4449

第 1 陣後発隊 (原田調整員ほか 13 名) : 213-71-48-1990

(以上は原田調整員からの情報)

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ（４）

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 01：25

作成者：緊急援助隊事務局 坂田

| | |
|--------|--------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 01：20～01：25 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話による連絡 |
| 情報入手先 | JICA フランス事務所、石田副団長、原田調整員 |
| 情報入手者 | 緊急援助隊事務局 坂田 |

内容：

(1) 第 2 陣は 18：25 にフランス・ドゴール空港に到着。機材の引取を終了し、オルリー空港に向かって出発。

(以上、フランス事務所)

(2) 第 1 陣先発チーム 4 名は、Thenia のデモリ地区にある倒壊した 6 階建てホテルを搜索対象として選定（5 月 14 日 18：05 現地時間）。同建物は現在、半分部分を重機にて搜索作業中。残りの半分部分には重機は使用しておらず、その瓦礫の中に 2 名が埋められているらしいとの情報がある。ここを日本チームの搜索救助サイトとして確保した。第 1 陣後発隊 14 名の到着を待って直ちに搜索救助作業に取りかかる予定。場所は海沿いのデモリエールバーディーのコンプレックスあるいはル・ノータス、ラージュ近辺。

(3) 定期交信は 2 時間おきにチーム側から当事務局にすることとした。

(以上、日本時間 01：10、石田副団長からの情報)

(4) 第 1 陣後発チーム 14 名は、Thenia に向けて渋滞の中を移動中。当事務局より同チームに対し上記先発チーム待機場所に向かうよう指示した。

(5) 定期交信は 2 時間置きにチーム側から当事務局にすることとした。

(以上、日本時間 02：15、原田調整員からの情報)

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (5)

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 03：30

作成者：緊急援助隊事務局 坂田

| | |
|--------|--------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 03：15～03：25 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話による連絡 |
| 情報入手先 | JICA フランス事務所、石田副団長、原田調整員 |
| 情報入手者 | 緊急援助隊事務局 坂田 |

内容：

(1) 第 2 陣は 5 月 23 日 20：15 にフランス・オリリ空港にて全メンバー、機材ともにチェックイン終了。ただし、フライトは 1 時間程度遅れる見込み。

(2) アルジェリア-ド・ゴール間の帰国フライトは週明 (5 月 26 日月曜日) に予約を試みる。まず、アルジェリアにて日本大使館から現地のアルジェリア航空本社をプッシュして見て、無理であればフランス側で予約を試みる。

(以上、フランス事務所)

(3) 第 1 陣先発チーム 4 名が活動サイトとして選定していた Thenia・デモリ地区の 6 階建てホテルでは、19：00 ルクセンブルクチームが 5 頭の救助犬とともに搜索救助を開始。その後、19：20 第 1 陣後発チーム 14 名が到着、合流。ルクセンブルクと独チームは生存者がいないとして退去。

(4) 現地時間 19：40、多くの被災者が周囲で見守るなか、日本チーム第 1 陣が搜索救助活動開始。

(5) 本日 (5 月 23 日) 夜は当地にて野営。倒壊ホテルと同じ敷地内のバンガローに指揮本部と機材置き場等として活用 (所有者の了解済)。セキュリティに関しては、ガードマン (銃保持) を 3 名雇い周囲の警備にあたらせることとした。

(6) 通訳 1 名同行。英語は全く通じない。

(7) 医療ニーズは高く、日本大使館からも外務公電にてその旨が伝えられる見込み。

(以上、石田副団長、原田調整員)

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (6)

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 05：45

作成者：緊急援助隊事務局 相良

| | |
|--------|------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 05：30～05：40 |
| 情報入手手段 | フランス・アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | JICA フランス事務所、原田調整員 |
| 情報入手者 | 緊急援助隊事務局 相良・大野 |

内容：

(1) 第 2 陣は 5 月 23 日 21：45 にフランス・オルリ空港を約 1 時間 40 分遅れで出発。
全メンバー、機材とも搭乗・搭載。

(以上、フランス事務所)

(2) 第 1 陣は活動サイトで生存者を発見。現在救出活動中。

第 2 陣も第 1 陣に合流し近隣サイトで活動する予定。

(以上、原田調整員)

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (7)

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 06 : 55

作成者：緊急援助隊事務局 相良

| | |
|--------|--------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 06 : 50 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | 緊急援助隊事務局 大野 |

内容：

(1) 第 1 陣活動

活動サイトの倒壊物から要救助者（子供）の手が見えている状況。

これに慎重に対応しているため、時間を要している。

現在、トルコチームと共同で活動中。

(以上、石田副団長)

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ（8）

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 07：45

作成者：緊急援助隊事務局 相良

| | |
|--------|-------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 07：30, 07：40 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | 緊急援助隊事務局 大野 |

内容：

(1) 第 1 陣活動

要救助者は子供ではなく 21 才男性。氏名はラドワン・ナレムワジと判明。

まだ救出には至っていない。

倒壊した建物はホテルであり、同氏はそのホテルのフロント係。

サイトは発災時 9 名おり、うち 2 名死亡確認、1 名救助済み、6 名が不明であったがラドワン氏はその 1 名。

(以上、石田副団長)

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (9)

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 08:05
作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 相良

| | |
|--------|------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 08:03 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大野 |

内容：

(1) 第 1 陣活動

活動サイトにて 21 才男性を救出。(氏名：ラドワン・ナレムワジ氏)

トルコチームと合同での救出。

現地時間 23:59 (日本時間 7:59) 救出。0:01 (同 8:01) に救急車に収容・搬送。

活動サイト名 (ZemmouriELBAHRI Lu-Lotas)

(以上、石田副団長)

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ（10）

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 09:10

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 相良

| | |
|--------|-------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 09:05 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | アルジェリア大使館 久保企画調整員 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 相良 |

内容：

(1) 第 2 陣

現地時間 22:50（日本時間 6:50）に到着し、機材の引取を全て完了した。
夜間であり安全確保のため警察の同行を得てこれから現地に移動する。
活動現場の第 1 陣とは連絡をとれている。

(以上、久保企画調整員)

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (11)

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 13:00

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 12:50 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

内容：トルコチームとの連携について

(1) 日本チームが活動を展開していたル・ロータスホテルの倒壊現場に、トルコチームが共同活動の実施を申し入れてきた。

(2) トルコチームの 1 名は JICA の緊急援助にかかるグループ研修の受講者であり、日本チームに日本語で話しかけてきた（当該コースリーダーをされた大阪消防の鈴木氏をよく知っているとのこと）。

(3) トルコチームと日本チームの協力は円滑なものであり、救出された男性の搬送なども適切に協力しつつ行われた。

(4) トルコチームはトルコ政府のレスキュー隊員が 10 名と、トルコの NGO のメンバーが 10 名からなる混成チーム。

(5) 現在トルコチームは活動現場を去っている。

なお、ホテルオーナーは日本チームの活動に深く感謝しているとのこと。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (12)

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 17:15

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 坂田

| | |
|--------|------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 16:40~17:00 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 坂田 |

- (1) 救助チームは引き続き、1名の生存者を救出した場所で残りの5名を捜索活動中。
- (2) アルジェリアの軍関係者の支援を受け、人海戦術で作業を展開中。
- (3) 気候は、朝晩の気温差が大きく、昼間は25℃、夜間は10℃近くまで冷える。乾燥しているのでのどが乾く。
- (4) 飲料水は十分調達できる。
- (5) 捜索救助の現場では、食堂等なく、全てアルファ米、レトルト等持ち込んだ食糧で凌いでいる。
- (6) 5月24日の夜から、発災後72時間が経過することから、アルジェのホテルに宿泊する予定。
- (7) 久保企画調査員は大使館に詰めている。現地本部にはいない。
- (8) 医師も看護師も救助チームとともに帰国するが、医師のうち一人は現地の医療ニーズの調査/把握につとめる。
- (9) ブーメルデスの病院は、機能はしているものの、関係者は医師看護師がまだ足りないと言っている。
- (10) 被害の甚大なブーメルデス地区には宿泊に適したホテルはないが、首都アルジェデのホテル宿泊は可能。医療チームはアルジェからブーメルデスへ(35km程度)通うのが適当。渋滞は少々問題。
- (11) 石樽団長が本日朝ブーメルダスのLEMAにて日本から新たに医療チームが派遣されることを伝えたところ、たいへん喜ばれた。サイトについてはLEMA側とチームとで別途相談する。
- (12) 救助チームの活動終了後、医療チームにシフトするのは大友調整員。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ（13）

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 19：55

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 19：45～19：50 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

- (1) 現地時間 11：35 に男性の切断された片足を発見。
- (2) 発見場所は先に生存者を発見した現場。
- (3) 瓦礫にひどく埋まっている状態で発見されたために、今後重機等を利用し搜索を継続するとの由。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ（14）

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 21：50
作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 清水

| | |
|--------|-----------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 21：45～2：50 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 清水 |

本日救助チームはホテルに宿泊する。2カ所に分かれ

- 1 ホテル・ソフィテル（Sofitel）
TEL：021685210
- 2 ホテル・エルデジャザール（Eldjazair）
TEL：021330933

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ（15）

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 22:15

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 清水

| | |
|--------|------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 22:052~2:10 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 清水 |

- (1) 現地時間 13:55 遺体 1 名（男性）救出
詳細は全く不明です。救出したという報告のみです。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ（16）

作成日時：平成 15 年 5 月 24 日 23:55

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/24 23:41～23:43 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

- （1）発災後 72 時間まで救助活動を展開する予定。
- （2）隊員はかなり疲労しているところ、72 時間経過した時点でホテルに引き上げる必要があると考えられる。
- （3）ホテルまでの距離は約 50Km。
- （4）ホテルで一夜過ごした後、現地時間の日曜日に再び同一現場で救助活動を展開する予定。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (17)

作成日時：平成 15 年 5 月 25 日 02:15

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|------------------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/25 01:35、01:48、02:08 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

(1) 大使館の支援のもと、帰国便の調整を行った結果、次のフライトの利用する事となった。

5/27 13:25 アルジェ→16:15 ローマ AZ801(アルタリア航空)

5/28 13:25 ローマ→5/29 10:25 成田 AZ1790

(2) 59名の隊員と2トンの機材、2等の警備犬の輸送についても了解を得ている。

(3) 超過荷物の経費はKSAを通じた後払いで良いとのこと。

(4) 本旅程については公電で外務本省に入る予定。

(5) 現地時間 16:30 頃 1名の要救助者を発見。ただし、生存していないとのこと。

(6) 日本時間 5/25 の 02:08 の時点でも救出中であり、全身の5分の1程度が瓦礫から出てきているとのこと。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (18)

作成日時：平成 15 年 5 月 25 日 09:00

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 清水

| | |
|--------|------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/25 08:50 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 現地大使館員 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大野 |

- 1 FAX18 で連絡したとおり、ホテルは 2 カ所。
全員がホテルに入ったのは、現地時間 22 : 30 である。
- 2 隊員は活動開始から一睡もしていない。
よって一旦活動を中止して、ホテルで休み明日再度活動開始。
活動計画は不明。
- 3 移動手段について
 - (1) マイクロ (23 人乗り) 1 台
 - (2) マイクロ (20 人乗り) 1 台
 - (3) 4WD (パジェロ様の車両) 3 台
 - (4) トラック (4 トン、8 トン、10 トン) 各 1 台です。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (19)

作成日時：平成 15 年 5 月 25 日

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/25 03:10 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

(1) 現地時間 24 日 18 時 32 分にホテル従業員でなくホテルの客と思われる 1 名の男性遺体の救出。

(2) 現地時間 19 時頃 NHK 国際部から団長が電話取材を受けた。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (20)

作成日時：平成 15 年 5 月 25 日

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 清水

| | |
|--------|------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/25 18:20 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 大友調整員 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 清水 |

1 大友囑託職員からの報告

- (1) 現地時間 10:10 搜索活動を開始した。
- (2) 場所については、昨日と同様。
- (3) 勤務シフトは、原則各小隊単位での3交替であるが、要救助者発見等の特異活動時は、2個小隊、全員で作業となる。

昨日は、たびたび2個小隊で活動した。



2 外務省、石樽団長からの情報

- (1) 昨日と同様の場所で作業する。予定としては1日中その場所で作業。
- (2) インマルサットの番号についての連絡
なにかあれば、010 874 762482730へ。
ただし、緊急時か若しくは、やむを得ず連絡する場合は、長話しないで下さい。

3 CNN 情報、死者は2、000人から3、000人に上る見込み。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (21)

作成日時：平成 15 年 5 月 25 日

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 清水

| | |
|--------|------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/25 23:10 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

- 1 新たに2名の要救助者を発見した。
現在救出活動中。
- 2 他国チームについて (OSOCC 情報)
中国チームは、30 人救助犬 3 頭で活動。
韓国チームは、21 人救助犬 2 頭で活動。
中国、韓国共に現地時間 15:00 まで成果はない。

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (22)

作成日時：平成 15 年 5 月 25 日

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|------------------|
| 情報入手日時 | 2003/05/25 23:10 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 石田副団長 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

- (1) 新たに2名の要救助者（遺体）を発見し、現在救出に当たっている。救出活動は地元の消防と軍隊と日本チームの合同で実施している。地元の人にまかせると重機で粗雑に救出する傾向がみられるので、日本チームは人手による丁寧な救出に努めている。
- (2) 本日の搜索活動は当該2名の救出が終了するまで続けることとしており、夕食は現場で取ることとなっている（あと5時間程度要する模様）。
- (3) OSOCCからの情報によると
 - ・今回の災害に対し20ヶ国から38チームの救助チームが派遣されて、1000名以上のレスキュー隊員と100頭以上の救助犬が活動した。
 - ・発災後72時間経過した時点で生存者の存在の可能性が少ないと判断し、OSOCCは調整業務をアルジェリア側対策本部に移管することとしている。
 - ・ほとんどの救助チームは25日及び26日に撤収する予定であり、そのフライトのアレンジにOSOCCは忙殺されている。
 - ・中国チーム（チーム名：CISER）は、30人救助犬3頭で活動、韓国チーム（チーム名：119レスキューチーム）は、21人救助犬2頭で日本チームの現場の東方に位置するBordj-Menailで活動しているが、これまでに生存者の救出はなかったとのこと。
- (4) 医療ニーズについてOSOCCに確認したが、十分な情報は有していなかった。
- (5) OSOCCによるとフランスと南アが医療活動を実施しているとのことであるが、日本の医療チームの派遣を大歓迎するとのことである。
- (6) 現時点で日本チームが救出活動している地区の近くのZemmouriで病院が倒壊したことから、同地区でテント診療所の開設がOSOCCから勧められており、救助チームの井上医師が現在調査中。

(7) 日本チーム救助犬の活動

- ・現地時間 24 日に 8 回の救助犬による搜索活動を行ったところ 2 回の反応があった。同日救出した 2 遺体と救助犬の反応とは連関があるものと考えられる。
- ・現地時間 25 日は雨と風が強く救助犬の活動は制限されている。

(8) 現地時間 23 日に救出した生存者について

- ・生存者は、けが一つない状態で救出された。救出者は軍事病院に運ばれたが、その後の経過についてはわからない。
- ・搜索ツールは日本チーム隊員の「耳」であった。
- ・救助ツールは、日本チームの機材が届いていない段階だったので、機材を有するトルコチームと連携しての救出となった。

(9) エピソード

- ・日本チームがガソリンスタンドで給油する際、たまたま現地通貨の持ち合わせがなく、US ドルでの支払いを打診したところ、次の給油を待つアルジェリア市民が、日本救助チームの活動に感謝する気持ちという理由で、代わりに支払っていただいた。
- ・マーケットに買い物に行ったところ、同じく日本救助チームの活動に感謝する気持ちという理由で、店頭においてあるトマトの全てを大変安くいただいた。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ (23)

作成日時：平成 15 年 5 月 27 日

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 笹館

| | |
|--------|-----------------------|
| 情報入手日時 | 日本時間 2003/05/27 09:40 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 原田調整員 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

26 日の活動内容

機材等のメンテナンス及び撤収を現地時間の 26 日夕刻に終了し、現在大使館で保管

27 日の活動予定

大使館への挨拶と報告後午前 10 時に機材の搬出を開始し、同 11 時にチェックイン予定。

その他

隊員の体調は問題ないが、切り傷や疲労のため 25 名の隊員が医師の手当を受けた。

以上

アルジェリアにおける地震災害に対する国際緊急援助隊
救助チーム現地活動報告メモ（24）

作成日時：平成 15 年 5 月 27 日

作成者：JICA 国際緊急援助隊事務局 大田

| | |
|--------|-----------------------|
| 情報入手日時 | 日本時間 2003/05/27 22:20 |
| 情報入手手段 | アルジェからの電話連絡 |
| 情報入手先 | 大友調整員 |
| 情報入手者 | JICA 緊急援助隊事務局 大田 |

- （1）現地時間 14:00（日本時間 22:10）に AZ2801 は 45 分遅れでアルジェを離陸
- （2）出発の遅れは荷物の積み込みに時間がかかったため。
- （3）JICA の携行機材 16 ケース（3 斤のものは含まない）が積み残されたので、明日の便でアリタリア航空が日本に送付するとのこと。日本到着はチームより 1 日遅れの 30 日となる。なお、この積み残しの荷物にかかる引き取りようの書類などを大使館経由で JICA 本部に送付するようアレンジ済み。
- （3）日本チームは全員元気とのこと。
- （4）チェックイン時に空港ロビーで他の国のレスキューチームとワッペンとの交換や一緒に写真を撮るなどの交歓するような微笑ましい光景が繰り広げられたとのこと。

以上

